



低出生体重児の遊びを用いた発達支援プログラムの開発

福島大学 人間発達文化学類

教授 高谷 理恵子

1. はじめに

発達に問題がないとして低出生体重児の発達フォローアップから卒業した子どもたちの中に、低出生体重児に特有の発達の特性があることが指摘されている。特に目と手の協応が必要とされる課題の成績が低いとの指摘が多く、本邦でも安藤ほか(2006, 2007, 2008)によって報告されている。また全身の動きの制御についても不器用さがあり、長島ら(1979)は発達が良好な低出生体重児の群であっても、「ケンケン」については対照群に対して有意に低い通過率を示したことを報告している。極低出生体重児の幼児期の協調運動を検討した増田(2004)も、同年齢の幼児と比べて低い運動パフォーマンスを示し、なかでも静的バランス課題での低成績が目立つと指摘している。以上の知見から、目と手の協応を含む身体制御の不器用さは、低出生体重児が抱えやすい発達の特性である可能性が考えられる。

さらに我々が低出生体重児の母親に対して行ったアンケート調査では、低出生体重児の不器用さは身体面だけでなく、心理的な面にも表れる可能性が示唆された。出生体重が2,500g以上の子どもの母親と比べると、低出生体重児の母親は自分の子どもが「行動や活動の切り替えがしにくい」「初めてのことはなかなか取り組みにくく、苦手なことを拒否する」「できる・できないに関わらず、いつも助けを求める」「新しいことをするとき表情が硬かったり、無意識に体に入力が入っている」「ちょっとしたことを気にし、いつまでも引きずる」と感じていることが分かった。これらの結果は、実際に幼児期の低出生体重児の発達支援プログラムを実施する中でも感じる子どもたちの特徴とも一致しており、新しい場面や課題に対する苦手意識が、さまざまな発達を促す活動への参加を阻害している可能性も考えられた。低出生体重児の発達リスク児を支援するためには、単に身体制御能力を育成する課題を並べるだけでなく、このような低出生体重児の心理特性へも配慮した発達支援プログラムが必要であると考えられた。

また明確な発達障害の診断を受けない低出生体重児の多くは、発達上のリスクがあるにもかかわらず、公的な

発達支援の対象にはなりにくい。行政や医療機関からの発達支援サポートを受けられないまま、保護者が不安を高めていることも多い。子どもの出生体重が小さいほど、子どもの発達に対する保護者の不安は大きくなる傾向があるとの報告もある(山口・遠藤, 2009)。そこで上述した低出生体重児の発達を支援するプログラムと並行して、低出生体重児の母親支援も同時に実施することが重要であると考えた。

平成26年度に試行錯誤して実施してきたプログラムを下地に、平成27年度は中山雄雄科学技術文化財団の助成金を得て、低出生体重児の発達支援プログラムのマニュアル化とパッケージ化を試みた。プログラムは幼児教室と母親支援教室に分かれる。幼児教室ではプログラムの大枠を定め、5つのパーツを組み合わせて、毎回のプログラムを構成する。5つのパーツのうち、はじまりと終わりの「あいさつ」については定型化し、残りの部分は子どもたちの抱える発達上の課題を意識して選択する。さらに平成27年度は、それらのプログラムを一般の保育士に実施可能なレベルにまで記述した。研究者ではなく、低出生体重児についても特別な知識のない保育士に実施してもらうことで、今後、保育園や幼稚園、地域の様々な活動において取り入れやすい形になるようなマニュアル化を意識した。

2. すくすく幼児教室の実施概要

(1) 参加対象児

以下に記す「すくすく幼児教室」の参加者募集に応じた参加希望のあった4名の幼児を対象児とした。対象児は、5歳男児1名(A児)、5歳女児2名(B児、C児)、4歳女児1名(D児)であった。出生体重は、B児とC児が700g台、A児とD児が1,000g～2,500gの範囲内であった。A児、B児、C児は平成26年度、試行錯誤的に開催した「すくすく幼児教室」に在籍していた幼児である。

(2) 参加募集の手続き

参加者を募集するにあたりX病院で出生した低出生体重児のうち、平成22年4月2日～平成25年4月1日の

